

甌島調査報告

「離島」里のUターンとIターン

高橋 さつき

1. はじめに

2006年7月1日から5日にかけて鹿児島県の甌島にある里町で行ったフィールドワーク実習では、参与観察やインタビューを行った。女性や若者を対象に、Uターン、Iターンを行って、里に米られた方にお話を聞いた。Uターンするのは主に男性と言われている里で、女性がどのように地域になじんだのか、戻ってきた若者はなぜ帰ってこようと思ったのか、考察する。

2. フィールドの概要

甌島は薩摩半島西方約30kmの海上に位置し、上甌島、中甌島、下甌島の3つの島と多くの無人島を持つ長さ40kmの列島である。「古い文化の吹き溜まり」と言われるように、その隔絶性から、歴史や民俗の宝庫とされてきた(塩田2000)。

今回滞在した上甌島にある里町は串木野港からフェリーで約1時間の距離にあり、人口は1428人、世帯数649戸である(平成18年6月現在:薩摩川内市里町支所資料)。里はかつて行政的には里村だったが、平成16年に甌島の3村(上甌村、下甌村、鹿島村)、本土の4町(川内市、樋脇町、入



写真、上甌島の陸繋砂州(トンボロ)

米町、東郷町、祁答院町)と広域合併を行ない、薩摩川内市となった。主な産業は水産業で、キビナゴ漁、かんばち養殖漁業などがあり、里の漁協組合員数は337人である。しかし近年水産資源の減少や魚価の低迷、漁業従事者の高齢化、後継者不足など漁業を取り巻く環境の厳しさが問題とされている(薩摩川内市里町支所資料2006)。

また、道路、河川、砂防、港湾、漁業関連施設などの整備を行なう建設業も里町の経済に大きな比重を占めている。甌島地域の社会経済は公共事業を中心とした建設投資によって支えられていると言われ(薩摩川内市里町支所資料2006)、漁業従事者と建設業従事者が多い。

3. Uターンと定住

里には幼稚園、小学校、中学校が各一校ある。しかし、島内に高校がないために子供たちは中学校卒業後、「本土」の高校に進学し、「寮・下宿などにより生活を送らなければならない、保護者の経済的負担も大きい」という(薩摩川内市里町支所資料2006)。筆者を含め、「離島」の調査に当たり「Uターン」者に注目する学生が多かったが、実は「甌島にいる人はみんな一回外に出てUターンして来た人」であった。島民は15歳になると皆「本土」へ渡るのである。そしてそのほとんどが高校卒業後「本土」で就職する。「漁業か建設業くらいで、島には仕事がない」ためである。この「本土」という表現は、「離島」という認識による隔絶性・特殊性のイメージを伝えるものであり、筆者が里を捉える上で最も重要な要素となった。それゆえ、「出入りする」ことに聞き取りの重点をおいた。

里町の高齢化率は38%であり、世帯数は1980年代に最低を記録するが、その後は安定している。「甌島漁村における家族の可動性」を著した高桑史子によると、甌島ではどのムラでも兄弟の一人が残って、あとは全員が何らかの形でムラを出るのが普通であったという。これは、一子残留によ

る「非相続者のはじき出し」や、逆に誰か一人を残して全員が有利な場所へ移動する選択とも考えられるという(高桑2004: p.181)。いったん島外に働きに出たものが戻ってくるUターンは1980年代から盛んに行われるようになり、定年後のUターンに加え、親の死亡や高齢化によって兄弟姉妹の一人が単身であるいは家族を伴って戻ってきたという例も多くみられる。また土木事業や公共施設の開所、小規模工場誘致などにより、故郷での就業を求めて帰郷も行われているという(同: p.182)。

これに伴って薩摩川内市では、定住促進対策として住宅取得補助金や職の斡旋などを行っている。定住促進補助金制度では、薩摩川内市に住宅を購入・新築した人を対象に申請すると補助金が受け取れ、里町では(市内の)他の地域より高額の100万円が交付されるという。

高桑は、甌島の高齢者のほぼ全員が島外で働いていたということから、もともとムラをでることが一般的であった甌島で、戦後の新イデオロギー「創られた過疎」(甌島に限らず過疎地で離村・転出の理由付けとして、産業がないので出ざるを得なかったという言説)が語られる。高等進学が一般的になる1970年代以降、進学のために島を出た子供が「働く場のない」島に戻ることはなくなった。一般的に「僻地にはこれといった産業がなく、現金収入の道がないので若者は出稼ぎに出るのが必然であった」といわれるが、実際のところ、「僻地」「離島」は現代の産物である。「創られた過疎」として定着する言説は高度経済成長以降に醸成され、若い60歳代やそれ以下の世代にこの言説が多く語られ、仕方なく離れざるを得なかったくふるさと>が強調される(高桑2004)。「都市といなか」という二項対立的価値体系の成立による新たな意味づけによって、「ムラを出るのが当然」から「ムラを出ざるをえなかった」という無意識のすり替えが行われたといえる。

しかし、筆者の聞き取りの中では、「出ざるをえない」という否定的な声はそれほど語られなかったし、高校進学に伴って「本土」へ移り就職することへの不満も聞かれなかった。これは、話を聞いたのがみな里の人々であるからかもしれない。「本土」に「定着」した人々から話を聞くことができれば、その語りはまた違うことだろう。どちらにしろ、筆者が話を聞いたMさんの店に集ま

る客の若者たちからは「ムラを出ること」に対する否定的な語りは聞かれなかった。

以下は、中学卒業後鹿児島の高校へ進み、大阪で働いた後に里町で建設業の仕事をしている28歳の男性の語り(カッコ内は筆者の問い)である。

(里に戻ってきたのは何で?)

大阪で働いてたけど、兄妹も里を出てたし、俺戻ろうかなって。

(両親だけになっちゃうしね)

大阪でダイビングのライセンスも取ったから、里に来て観光客相手にダイビングとかできるかなと思ったし。でもしげが多くて無理だった。

(また里を出たいと思う?)

出たい気持ちもある。わからない。でも、ここだと海も山もあるから、自然の中で遊べて楽しいから…。昨日はカブトムシ捕まえにいった(笑)。

大阪という大都市で働いていた彼にとって、里はしばしば「自然がいっぱい」という言葉で語られる一方で、「ここはみんな知り合いだから、周りの目が気になる」という批判的な評価もなされたりする。また里を出て働きたいという気持ちがあることも隠さない。しかし、彼が住んでいた大阪では、運動会などや同窓会などを行う甌島出身者のネットワーク(郷友会)があり、参加していたという。島を出ても、郷友会に関わっており、里の情報やつながりを保持している。

また、筆者が他の若い世代の人々に尋ねたところ、兄弟姉妹の中で帰ってきているのは自分ひとりという答えが多く、一子残留の形が強く残っているといえる。しかしその一子は「残留」ではなく、必ず島外に出るため、「一子Uターン」の形をとる。そして「ムラを出ざるをえない」というよりも「(兄弟姉妹の)誰かが戻ってくるのが当然(あるいは戻らなければいけない)」という気持ちを持っていたようだ。

4. IターンとUターン

—二人の女性の事例—

筆者は里集落に数件ある飲食店に通い、店主であるIターンの女性と彼女に紹介していただいたUターンの女性に話をうかがった。

4-1. Uターン

里集落で飲食店を営むMさんは、里出身の夫の帰郷に伴い、甌島に住むことになった。彼女は結婚する前は鹿児島県のK町で九州地方の大手のバス会社事業所で、18歳から22歳までバスガイドとして働いていた。バス会社の交通指導をしていた警察官の夫と知り合い、結婚したという。鹿児島市内で働いた当時のことは、とても充実したものだった。寮に入ったり、「お姉さんたち」と呼ぶ先輩たちに付き合わされたりなど大変なこともあったが、バスガイド時代は楽しいことが多く、バス会社と同じグループの化粧品屋や洋服店での買い物や、ガイドとして九州各地に観光に行った思い出などが語られた。里に移ってきた当初のエピソードとしては、何かにつけて世話を焼いてくれる近隣の人々のいうことをMさんは全部聞いていたため、大変だったという。その後、徐々にその加減がわかっていった。現在では、彼女の店は青年団をはじめとする里の若者が集まる場となっている。里の社会関係においても詳しく、里の社会状況についての意見も語ってくれた。夫の帰郷で里にUターンしてきたMさんだが、このような飲食店を営み、集落の人々とコミュニケーションすることで、人間関係を築いている。里の人、一人ひとりの名前や職業にも通じていて、筆者も何人もの方を紹介して下さった。

4-2. Uターン

Mさんが「ぜひ紹介したい」と言ってく下さったのが、Aさんである。彼女は「地主の家系」で、小学校3年生の時に、家族で鹿児島市へ移り、福岡県の短期大学を卒業した後に、大手化粧品会社の社員として働き、結婚後には夫と一代で冷凍機と肥料の会社を作ったという。そして、里にいた彼女の母親が身体を壊すと、「他の兄弟よりも帰りやすいお前が、里に戻ったら」と夫にも言われ、Aさんは「こっちに来るときに鹿児島のは全部他の人に受け渡し」、里へ戻った。現在彼女は「好きなことをして」暮らしているが、家の敷地は広く、改築した旧家と新しい住居の二つを所有している。

どの地方でも言われるように、地方には働き口がないために都会へ働きに行くが、里では一度里を出ても、親が残っている場合には将来的に親の

世話などのために戻ってくる。加えて、筆者がUターンした里の男性に話を聞くと、ほとんどが長男であり、また兄弟の中で一人だけが戻ってきているという形が多い。里では兄弟姉妹のうちの一人在り帰ってくるという形がとられている。さらに里のUターンは男性がほとんどだそうで、薩摩川内市役所里支所の方によると「女性はほとんどいない」という。これには「あっち（本土）に嫁にいったら戻ってこない」ということや、女性の雇用が少ないことが理由としてあげられる。「女性の職業と云ったら、漁師の嫁か学校の先生、最近では老人施設の介護士ができたけど、やはり限られる」中で、Aさんは、経済的に恵まれていたことがUターンを可能にさせたといえる。

5. 調査を終えて

「離島」独自のものとして考えていた「Uターン」だが、これは高校がないために「進学率100%」という里においては島に住む人々のほとんどがUターン者であり、ほとんどの人が島外での生活を体験していることがわかった。甌島は「Uターン」者の島であると言える。「離島」というカテゴリによって、「閉鎖的、過疎、古い慣習が残る場所」という印象があったが、交通や教育によって、人々は流動的に往来しており、島ゆえの隔絶性というものがあまり感じられなかった。「離島」を感じたのは、人々が使う「本土」という言葉からであった。外界との交通が遮断される台風時やお盆、正月などの帰省時などの非日常の期間にこそ「離島」の性質が強く現れるのかもしれない。

筆者はライフヒストリー調査が目的だったが、Mさんの飲食店において参与観察を続けるうちに里の同年齢集団や漁協、商工会の内部の人間関係、またそれら集団間の関係性にも興味を持った。「狭い里の中でずっと顔を合わせていかなきゃいけない」という青年団の言葉のように、何処その誰と言うだけで分かってしまう里の中の生活や下甌島・中甌島との関係、選挙、「利益を追求する」人々など、そこにはたくさんの思惑が存在する。このような「閉鎖的」と言われる空間の中のダイナミクスにも興味がある。

【参考資料】

塩田 甚志2000『甌島—その風貌と歴史—』。

高桑 史子2004「甌島漁村における家族の可動性—その構造と変化—」『変貌する東アジアの家族』、佐藤康行・清水浩昭・木佐木哲朗編著、比較家族史学会監修、早稲田大学出版部。

薩摩川内市ホームページ

(http://www.city.satsumasendai.lg.jp/cgi-bin/odb-get.exe?wit_template=AM040000)